

都留文科大学電子紀要の著作権について

都留文科大学電子紀要のすべては著作権法及び国際条約によって保護されています。

著作権者

- 「都留文科大学研究紀要」は都留文科大学が発行した論文集です。
- 論文の著作権は各論文の著者が保有します。
- 紀要本文に関して附属図書館は何ら著作権をもっておりません。

論文の引用について

- 論文を引用するときは、著作権法に基づく引用の目的・形式で行ってください。

著作権、その他詳細のお問い合わせは

都留文科大学附属図書館
住所: 402山梨県都留市田原三丁目8番1号
電話: 0554-43-4341(代)
FAX: 0554-43-9844
E-Mail: library@tsuru.ac.jp

までお願いします。

[電子紀要トップへ](#)

二格名詞句とヲ格名詞句の語順の要因について

新聞記事全文コーパスに基づく一分析

On Factors that Determine the Order between *Ni* Noun Phrase and *O* Noun Phrase in Japanese

An Analysis Based on Examination of a Corpus of Newspaper Articles

小林 茂之
KOBAYASHI Shigeyuki

In this paper, I analyzed factors that determine the order between *Ni* noun phrase and *O* noun phrase in Japanese mainly from the viewpoint of semantics, based on examination of a corpus of newspaper articles. I present the following hypothesis on the relative importance of the factors that affect word order.

Idiom expression >> Focus position >> Length of NP >> Thematic roles

0 本研究の目的

日本語は、動詞のとり名詞句相互の語順が比較的自由的な言語である。しかし、名詞句相互の間には、基本語順があると考えられている。二格名詞句・ヲ格名詞句をとる動詞の基本語順では、一般に二格がヲ格に先行する¹。

動詞のとり名詞句の語順についての記述がある辞書に、IPALがある。IPALは、情報処理事業団によって作成された電子辞書である。本研究の目的は、IPALにおける基本語順の記述と、コーパス²から抽出された用例の語順とを対照して、実例における語順の決定にはどのような要因があるのかを分析することである。

IPALでは、二格とヲ格をとる動詞について、その基本語順が二格 >> ヲ格であるか、ヲ格 >> 二格であるかについて記述されている。本研究では、IPALから二格 >> ヲ格を基本語順とする動詞に含まれ、二格 >> ヲ格を基本語順とする動詞に含まれていない動詞群から、9つの動詞をコーパスの調査対象とした。なお、コーパスとして『日本経済新聞CD-ROM版1994』を使用した。

1 使用したコーパスについて

電子化テキストを言語研究用のコーパスにするためには、プレーンテキスト化することが必要である³。『日本経済新聞CD-ROM版1994』には、記事本文データが1ファイルとして収められている。本研究では、『日本経済新聞CD-ROM版1994』の約半年分弱をコーパスとして使用した。同本文データ約140MBをプレーンテキスト化すると、約80MBとなった⁴。

2 データの抽出について

2.1 IPALのデータについて

本研究では、コーパスに対する調査対象をIPALからPerlを用いて抽出した⁵。IPALは、CSV形式のテキストファイル形式のデータベースである。本研究で調査対象とした動詞群は、IPALで二格>>ヲ格の語順だけを基本語順として記載されているものである。IPALでは、二格>>ヲ格の語順で記載された動詞のうち、ヲ格>>二格の語順でも記載されているものがある。したがって、二格>>ヲ格の語順だけを基本語順として記載されている動詞を抽出するためには、それらの他にヲ格>>二格の語順を基本語順として記載されている動詞を抽出し、前者の内、後者に含まれていないものを更に抽出する必要がある

2.2 ChaSenによるデータの抽出について

動詞の直前にヲ格が来る用例と二格が来る用例を採取するために、コーパスに文法情報を表すタグを付けてデータを抽出した。

コーパスから目当てのデータを抽出するためには、GREPやAWKを用いることができる。しかし、コーパスに文法情報を表すタグが付けられていないプレーンテキストの場合、これらの方法で目当てのデータを効率よく検索することは、かなり困難である⁶。そこで、本研究では、プレーンテキストに文法情報タグを付けるために、日本語形態素解析ツールであるChaSen(「茶筌」)で処理した⁷。

以下は、ChaSenで標準出力で処理したコーパスである。文は、単語ごとに区切られ⁸、第一フィールドが本文、第二フィールドが漢字の読み、第三フィールドが基本型、第四フィールドが品詞情報である。このような基本型や品詞情報に基づいてデータを抽出することが可能である。

(1) ChaSen出力例

年の瀬	としのせ	年の瀬	普通名詞	
も	も	も	副助詞	
押し迫った	おしせまった	押し迫る	動詞	子音動詞ヲ行 夕形
三十日	さんじゅうにち	三十日	時相名詞	
、	、	、	読点	
北部	ほくぶ	北部	普通名詞	
九州地方	きゅうしゅうちほう	九州地方	普通名詞	
は	は	は	副助詞	
東シナ海	ひがししなかい	東シナ海	固有名詞	
の	の	の	名詞接続助詞	
南部	なんぶ	南部	普通名詞	
で	で	で	格助詞	
発生	はっせい	発生	サ変名詞	
した	した	する	動詞	サ変動詞 夕形
低気圧	ていきあつ	低気圧	普通名詞	

の	の	の	名詞接続助詞		
影響	えいきょう	影響	サ変名詞		
で	で	だ	判定詞	判定詞	ダ列タ系連用テ形

次に、選んだ動詞の直前に格助詞ニが来ている用例と、格助詞ヲが来ている用例とをPerlを用いて抽出した⁹。抽出されたデータには、所期されたデータ以外にもプログラム上の限界などによって、データとならないものが含まれる。こうしたものは、エディタ上で手作業によって取り除いた。

3 先行研究

3.1 二格、ヲ格の語順に関する先行研究

本節では語順についての先行研究について概観し、様々な要因の中で4節での分析の対象を明らかにしておく。

名詞句の一般的な語順については、基本語順の問題がある。本研究で対象とする「渡す」の二格は与格の名詞句である。ニが場所を表す後置詞である場合、二格>>ヲ格が基本語順である。統語論では、二格は付加詞として扱われるので、動詞項であるヲ格の方が二格よりも動詞の近くに位置すると考えられる。問題は、ヲ格、二格ともに動詞項である場合である。

統語論では、格理論(Chomsky 1981)に基づいて、二格>>ヲ格の順が基本語順とされてきた。格理論では、対格の付与に動詞との隣接条件が課せられるためである。つまり、このような分析では、ヲ格は動詞の直前に位置しなければならないので、ヲ格>>二格となる場合を扱うことが困難であった¹⁰。

それに対して、意味役割(Jacendoff 1972)に基づいた語順の分析では、名詞句は意味役割によって階層をなし、文中のより上位の名詞句が文の先頭に位置し、より下位の名詞句が動詞の近くに位置すると考えられている。つまり、二格の方が、ヲ格よりも意味役割の階層で上位に相当する場合、二格>>ヲ格の語順になると考えられるのである。益岡(1987)、Yatabe(1990)は、意味役割に基づいて日本語の語順を論じている。

上で述べたような統語的要因の他に、語順の決定が語彙的な要因によっている場合がある。慣用句の場合はそれに当たる¹¹。しかし、慣用句だけに留まらず、動詞の多義性と関係する場合がある。荻野・塩田(1994)は、朝日新聞天声人語をコーパスとして、「かける」について、ヲ格>>二格の語順の場合の意味が二格>>ヲ格の場合とは異なる特殊な意味になることを検証している。このような場合、語順の違いは多義性と結び付くと考えられるものである。

しかし、本稿で分析した動詞の範囲で、二格・ヲ格の語順の違いが動詞自体の意味の違いを引き起こしているという用例は発見されなかった。したがって、二格・ヲ格の語順は、必ずしも語彙レベルでの意味の違いと関係があるとは考えられない¹²。統語レベルにおける二格・ヲ格の語順の決定は、慣用句の場合を除いて動詞自体の語彙的な意味に関与しないと考えられるのである。

久野(1978)は、統語構造、語彙以外の語順の要因について論じている。そこでは、情報の旧・新、語句の軽・重がとりあげられている。情報の新・旧については、日本語、英

語ともに旧>>新であると論じられている。語句の軽・重に関して、英語では軽>>重になると論じているが、日本語については論じられていない。なお、Hawkins (1994) は、この問題に統語構造の上から根拠を与えている。

佐伯 (1960) は、日本語の語順の研究としては以上にあげた先行研究よりも古いものである。佐伯があげた語順の傾向には、統語的なもの、語彙的なもの、情報に関わるものがある。なお、徳永・田中 (1991) は、佐伯があげた語順の傾向について、IPALに記述された語順に基づいて検証を行っている。ただし、IPAL自体は、実例のコーパスと異なり、実態を直接反映するものではない。

以下の 3.2、3.3 では、二格の意味役割、久野・佐伯の研究の詳細について取り上げることにする。

3.2 二格の意味役割について

動詞のとり名詞句は、動詞から意味役割を付与される。意味役割相互には階層関係があり、それによって語順が決まる。文中のより上位の名詞句が先頭に来る。(2) では、左側に来る意味役割が上位である。つまり、ヲ格が [対象] であるので、他の意味役割の二格はヲ格に先行することになる。

(2) Yatabe (1990) による意味役割の階層

<動作主<受け手<道具<場所<対象(述語)>>>>>

コーパスから採取された二格の意味役割を用例と共に以下に示す。[被使役主] は、(2) の階層では入っていないが、[動作主] に準じるものである。同様に、[起点] は [場所] に準じるものである¹³。

(3) 二格の意味役割の用例

(a) [動作主] / させる

- ・その言葉通り、入社後すぐに美奈子さんに外回りの営業をさせるなど経営者としての経験を積ませてきた。

(b) [被使役主] / 強いる・促す

- ・しかし、田中長官に発言を促したのは亀井運輸相だった。
- ・それでも、在宅介護が家族にどれほど大きな負担を強いるかは分かった。

(c) [受け手] / 訴える・渡す

- ・三百十七人の全児童にいじめの背景をなくすよう「緊急アピール」を訴えた。
- ・その際、高校生の二男に「残った分はあげる」と留守中の生活費として二万円を渡した...

(d) [場所] / 植える・押す・塗る

- ・蚕都のイメージを強調するため、有志とともに商店街の道路に桑の木を植えているのもその表れ。
- ・買い主の中年サラリーマンは、この額を知ると契約書に判を押すことをためらった。
- ・もなかの皮にアンを塗る作業や菓子の包装、配達などをしていた。

(e)[起点] / 聞く

・有馬氏に「理科離れ」についての認識などを聞いた。

3.3 佐伯(1960)・久野(1978)

佐伯(1960)は、語順の傾向を9つあげている。その内で、二格・ヲ格の語順に関わるのは、次の三つである。

(4) 佐伯(1960)における語順の傾向(二格・ヲ格)

(a) 与格のニは対格のヲのまえにくる。(傾向4)

(b) ながい補語はみじかい補語のまえにくる。(傾向6)

(c) 動詞に、特定の補語をともなって融合(cohesion)化する慣用のあるばあい、特定の補語はそれを要求する動詞の直前にくる。(傾向9)

久野(1978)による以下の原則は、二格・ヲ格に関して提出されたものではないが、これらの間の語順にも適用できる原則であると考えられる。

(5) 旧から新へのインフォメーションの流れ(久野(1978))

文中の語順は、古いインフォメーションを表す要素から、新しいインフォメーションを表す要素へ進むのを原則とする。

4節では、二格とヲ格の語順について、佐伯・久野の原則をコーパスから得られたデータに基づいて検証し、語順を決定する要因について意味論的観点から分析する。

4 分析

4.1 意味役割

佐伯の(4a)から検討を始める。本研究の調査の結果を表1に示す。二格>>ヲ格の傾向は、徳永・田中(1991)¹⁴では、「明確な傾向を指摘できない」とされている。今回用いたコーパスにおいては、二格が[場所][動作主][被使役主][起点]の動詞については、二格>>ヲ格の語順が圧倒的に多い。また、二格が[受け手]の動詞については、二格>>ヲ格がヲ格>>二格よりやや多い程度である。したがって、(4a)の佐伯の主張は、二格が[場所][動作主][被使役主][起点]の動詞について確認される。一方、二格が[受け手]の動詞については、徳永・田中の主張が裏づけられる。

(4a)の傾向は、意味役割の階層の観点から説明できるものである。二格は、表1のどの意味役割の場合でも[対象]のヲ格より上位にある。このことは、表1で二格>>ヲ格がヲ格>>二格より全体的な傾向として優勢であることに一致している¹⁵。

IPALでは、2.1節で述べたように、ある動詞に多義性が認められる場合、それぞれが独立した項目として記載されている。したがって、IPALに基づく調査は一種の異なり語数の調査であり、コーパスに基づく調査は延べ語数の調査となるので、それぞれの結果は異なるものであると解釈すべきである。したがって、徳永・田中によるIPALでの調査で佐伯の傾向を検証できなかった点があることは当然であろう。

二格の意味役割によって、ヲ二型の比率に違いがみられるということは、統語段階後の情報構造における原則ではないということである。動詞のとる名詞句に与えられる意味役割は、統語構造的にはなく辞書的に決まることである。したがって、意味役割による語順は基本語順であると考えられる。

表 1 ニヲ型とヲ二型の比率

二	動詞	(a) ニヲ型	(b) ヲ二型	a / a + b (%)
動作主	させる	23	0	100.0
被使役主	強いる	34	3	91.9
	促す	127	11	92.0
	小計	161	14	92.0
場所	植える	26	4	86.7
	押す	24	1	96.0
	塗る	14	3	82.4
	小計	64	8	88.9
起 点	聞く	171	39	81.4
受 け 手	訴える	45	44	50.6
	渡す	63	36	65.6
	小計	108	80	57.4
合 計		527	141	78.9

4.2 名詞句の長さ

次に、佐伯の(4b)の傾向、二格・ヲ格の長さについて検討する¹⁶。長さの基準については、文節数を用いる¹⁷。また、長>短のように表すことにする。

表 2 では、動詞句の直前に来る名詞句をN2、先行するNPをN1とする。ニヲ型、ヲ二型ともに、N2>N1の用例の全体に占める比率は、合計でそれぞれ27.3%、4.3%である。言い換えれば、長い名詞句の方が短い名詞句に先行するという傾向があると言える。但し、ヲ二型の方が、ニヲ型よりもこの傾向がよりはっきりしている。ヲ二型では、4.3%を除いて名詞句の長さによる順序に従っているのである。

なお、名詞句の長さによる傾向には、二格の意味役割によってあまりはっきりした違いは見られない。つまり、動詞のとる名詞句の意味役割のタイプによって、相対的にN1>N2が多いとか、N2>N1が多いとかいうことはなさそうである。つまり、名詞句の意味役割とは独立した要因であると考えられる。ここで、二格の意味役割が[動作主]・[被使役主]である場合、ヲ二型のN2>N1が0%であることは、一つの傾向であるかもしれないが、もともとヲ二型の用例数が少ないことが反映されたものと考えられる。

Hawkins (1994) は、名詞句や前(後)置詞句の長さと言語の関係について詳しく考察している。これは、文全体の構造の認知しやすさに関わるものである。文構造を認知する場合、主要部から主要部への距離が近いほど、認知しやすく、反対に、遠いほど認知しにくい文構造である。日本語の場合、述語句が文末に来る。また、連体構造では、連体主名詞¹⁸は最後に来る。つまり、主要部右側構造であるので、長い名詞句の最後部に来る主名詞が短い名詞句の前に来るとき、長い名詞句の主要部と述語との距離は、短い名詞句分の

距離である。反対に、短い名詞句が長い名詞句の前に来るとき、短い名詞句と述語との距離は長い名詞句分、開いてしまう。したがって、日本語では、長い名詞句が短い名詞句の前に来る構造が認知上、好ましいものであると考えられるのである。

表2 名詞句の長さの比率

語順：N1 > > ... > > N2 > > V

		ニヲ型			ヲニ型			N2 > N1の比率	
		(a)	(b)	(c)	(a')	(b')	(c')	ニヲ型 c/a+b+c (%)	ヲニ型 c'/a'+b'+c' (%)
二 格	動 詞	N1 = N2	N1 > N2	N2 > N1	N1 = N2	N1 > N2	N2 > N1		
動 作 主	させる	12	4	7	0	0	0	30.4	-
被 使 役 主	強いる	7	11	16	0	3	0	47.1	0
	促す	57	30	40	1	10	0	31.5	0
	小計	64	41	56	1	13	0	34.8	0
場 所	植える	8	9	9	1	2	1	34.6	25.0
	押す	5	15	4	0	1	0	16.7	0
	塗る	5	6	3	1	2	0	21.4	0
	小計	18	30	16	2	5	1	25.0	12.5
起 点	聞く	30	106	35	1	38	0	20.5	0
受 け 手	訴える	8	20	17	2	39	3	37.8	6.8
	渡す	33	17	13	12	22	2	20.6	5.6
	小計	41	37	30	14	61	5	27.8	4.2
合 計	166	218	144	18	117	6	27.3	4.3	

以上論じたように、佐伯による(4b)の傾向や、Hawkinsの理論は、本研究で用いた新聞記事全文データにおいても確かめることができる。長い名詞句が短い名詞句に先行するという傾向は、ヲニ型でよりはっきり現れるので、ヲニ型の語順の原因は、名詞句の長さにも求めることができる。一方、ニヲ型では、名詞句の長さでは説明できない場合が少なくないことを示すものである。

4.3 慣用表現

次に、佐伯による(4c)の傾向、慣用表現の語順について検討する。本研究での調査の範囲では、慣用表現は、全てニヲ型に現れ、ヲニ型には現れない。したがって、佐伯の(4c)の傾向は、コーパスから裏づけられた。

表3 慣用表現における語順

	ニヲ型	ヲニ型
押す	9	0
渡す	4	0

採取された慣用句は、「押す」では、「念を押す」「らく印を押す」、「渡す」では、「引導を渡す」「バトンを渡す」である。「渡す」の場合、ヲニ型の用例も、表1で示したように

35%程度あるのだが、慣用句では現れない。ヲ格と述部との結び付きが強固で、語順が固定化されていると考えられる。

4.4 情報の新旧

久野の示した(5)の原則について、指示語や代名詞の場合を検討する。指示語や代名詞は、既出の事物を指す関係上、旧情報に当たる。N1が指示語や代名詞で、N2 > N1の用例を以下にあげる。

- ・今や冷戦構造は崩壊し、自社連立政権の時代ですから(笑い) 右も左もない状況の中で、人類共通の理想である平和を掲げて、それをきちっと世界の人々に訴えていかなければいけない、と思うのです。
- ・帰れば仕事にありつけると思うから」という彼の言葉を信じて、保護観察所は、彼に六千八十円(大阪までの旅費と弁当代)を渡し、釈放した。

上の用例は、久野の示した原則で説明できるものである。つまり、上例は、名詞句の長さの傾向に対する反例で、旧情報が新情報に先行している場合である。しかし、4.5でみるように、指示語に関してこの原則で説明できない場合があるので、この原則はそこで再検討することにする。

4.5 焦点

ヲ二型から、佐伯、久野による(4)(5)以外の語順決定の要因について考察する。ヲ二型の場合でも、名詞句の長さで説明できない用例がある。以下にあげる3例は、N2 > N1である。

- ・うち五リットルを住吉会系の別の組の組員に渡したところを捜査員に現行犯で逮捕された。
- ・その結果(1)会期は八十日とする(2)副議長ポストを野党である「改革」に渡すなどを連立与党に求めていくことを決めた。
- ・それは生きているうちに政権を別の人に渡すことだ」。

上例のような場合に対して、語順決定の要因を名詞句の長さ以外に求めなければならない。

上例の内、最初の例で、「うち5リットル」は前の文脈を受けている語句であると思われるので、久野の(5)の原則は当てはまる。しかし、残りの2例については、ヲ格と二格とのどちらが新か旧かを判断することは困難である。

上例の場合、二格は、新情報ではなく文脈上の焦点になっていると考えられる。ここで、焦点とは文脈上対比される要素が想定されるものである¹⁹。これらの二格に対して対比される要素が想定できる。すなわち、「別の組の組員」に対して「同じ組の組員」、「野党」に対して「与党」、「別の人」に対して「本人」がそれぞれ対比される要素であろう。

N1 = N2である場合、名詞句の長さからはどちらが先行してもよいことになる。

- ・インテル、モトローラなどがSVGLの装置採用に傾き、「米業界内で、SVGLを日本に渡すな」という雰囲気が強まった」と日本企業の首脳は証言している。
- ・重火器の返却に合意したセルビア人勢力は、五日夜から装甲車などを国連側に渡し始めた。

上例の場合でも、後続する二格が文脈上の焦点になっていると考えられる。ここでは、「日本」「国連側」はそれぞれ「米国」「セルビア人勢力」と対比されていると想定できる。他の用例についても、文脈上、対比される要素が想定できる。したがって、ヲ二型では、二格に焦点がある場合、それは動詞の直前の位置であると考えられる²⁰。

ヲ二型で、ヲ格が焦点となっている場合がある。以下の例でもヲ二型であげた例と同様に、N2 > N1であるので、名詞句の長さでは説明ができない。

- ・最優秀作品に賞金百万円を贈るほか、作品の設置を企画した企業や団体に賞状と記念品を渡す。

上例で、問題の二格名詞句「作品の設置を企画した企業や団体」は、それに先行する「最優秀作品」と対比されるものであると考えられる。

次例も名詞句の長さで説明できない。また更にヲ格に指示語が含まれているので、久野の(5)の原則では説明できない。

- ・九三年三月には、建設会社がテーエスデーに借入金の代物弁済としてこの株式を渡しているため、当初から松崎元社長個人に資金が流れることを狙っていたとみている。

上例では、「この株主」が焦点であり、「テーエスデー」が非焦点であると考えれば、指示語が後続していることを説明できる。

4.4であげた指示語や代名詞が先行する場合、それらは非焦点であると考えられることができる。このような場合でも情報の新旧の原則は、焦点・非焦点で言い換えることができ、指示語が後続する場合もうまく説明できる。したがって、焦点を導入することで、情報の新旧の原則を立てる必要がなくなる。

5 語順に関する原則の優先序列

4節であげたヲ格と二格との語順に関わる原則の優先序列について、以下のような仮説を提出する。

(6) 語順に関する原則の序列

慣用表現 > 焦点位置 > 名詞句の長さ > 意味役割

(6)の序列では、より左側にある条件が優先して適用されることを示すものである。慣用表現は、他の原則に比べ強い原則である。焦点と名詞句の長さの二つの条件間では、焦点による条件が優先される。そして、他に優先して適用される条件がない場合、当該の文は

意味役割による基本語順に従う。

上で示した序列では、より特殊な条件が優先して適用されると推測できる。つまり、慣用句は固定的な表現に限定されるので、他の条件より対象が狭いものである。また、焦点位置は個別的な文脈によるので、名詞句の長さよりも対象が狭いものである。

6 結語

約半年分弱の新聞記事全文電子化テキストに文法タグを付けた比較的大規模なコーパスを用いることで、二格・ヲ格の語順に関するデータを採取することができた。二格・ヲ格の語順には、二格の意味役割による傾向性がみられ、それとともに統語構造、情報、語彙による多層的な原則があると考えられる。

注

- 1 本研究では、二格、ヲ格をそれぞれ二格名詞句、ヲ格名詞句の略称として用いる。なお、二格、ヲ格は、日本語における形態格に対する便宜的な呼称として用いる。つまり、二格は、与格、ヲ格は対格と同義である。
- 2 最近では、加工していない電子化テキストの場合、コーパスと呼ばれるようになってきている。
- 3 巨大なファイルであり、中に制御コードを含むため、言語研究用のコーパスとするためには、ファイル分割や制御コードの除去が必要である。本研究では、初めに、WinSplitでMIFESで扱えるよう記事本文データを約14MBごとに分割した。次に、分割したファイルをMIFESの機能を利用して、制御コードを取り除いた。
WinSplitは、相良毅氏によるフリーソフトウェアである。次のサイト等から、入手可能である。<http://www.vector.com/>
MIFESは、メガソフト株式会社のエディタソフトウェアである。
- 4 近藤（1997）によると、『日本経済新聞CD-ROM版1994』の1年間の新聞全記事は、約206MBである。本研究のデータ量はその半年弱分に見合う大きさである。なお、使用したフィルターが、取り出されたプレーンテキストの大きさに若干影響することはあり得る。例えば、MIFESでは、純粹に記事部分だけを取り出すことはできない。しかし、ChaSenでの処理上、全く問題がなく、実用上差し支えない。
- 5 中島靖（1997）『日本語TEXT加工実践ガイドブック』（情報管理）所載のPerlスクリプトを利用した。同書には、CSV形式のデータベース処理用のスクリプトが多数収められている。これらはIPALを利用する場合に有益である。
- 6 日本語研究のための正規表現や文法タグを使った検索については、近藤（1991）、杉本（1992）で解説されている。
- 7 ChaSenは、奈良先端科学技術大学院大学松本祐志氏によって開発されたものである。本研究ではversion1.0を使用した。ChaSenは、次のサイトから入手できる。<http://cactus.aist-nara.ac.jp/>
- 8 この単語は、国文法における自立語、付属語の両方である。
- 9 Perlは、テキスト処理に向く汎用のコンピュータ言語である。目当てのデータを抽出するスクリプト（簡単なプログラム）を用いて、データを抽出することができる。ChaSenで出力され

たデータをPerlで処理する方法については、東京大学大学院総合文化研究科幸田薫先生からご教示を受けた。

- 10 対格名詞句に動詞との隣接条件を課す理論では、ヲ格が二格に先行する語順は、かき混ぜの場合を除いて認められないことになる。
- 11 佐伯(1960)は、慣用句の場合、動詞と直前の名詞句は融合すると論じている(後掲)。
- 12 これは、「渡す」に関する二格>>ヲ格の語順だけが記載されているIPALの記述が妥当であるということである。
- 13 但し、「聞く」の場合、語順において通常の場所の[起点]より前になる傾向がある。これは、この二格が[+人間]であるためであると考えられる。
- 14 徳永・田中は、傾向1~5について検証している。したがって、(5)、(6)については、扱われていない。
- 15 [受け手]の場合の二格>>ヲ格の割合が他の意味役割と比較して低い理由については、明らかでない。
- 16 久野(1978)は、日本語の名詞句の軽・重と語順の関係については述べていない。しかし、これは日本語にも適用できる原則であろう。英語の場合、軽>>重の語順としているのを、動詞との距離に置き換えれば、日本語では、語順が逆になるので重>>軽となるはずである。すなわち、本研究の名詞句の長さと同じ原則となる。
- 17 伝統的な呼称に従う。但し、文節は、統語論的には語に相当する。形態論と統語論における単位の区別は、古く松下大三郎(1928)が行っている。氏は、統語論上の最小単位を「詞」と呼び、それ以下の形態論的単位の「原辞」と区別している。
- 18 国文法では、被修飾名詞に該当する。
- 19 「焦点」は、Rooth(1992)、矢田部(1996)の定義に従う。
- 20 Krifka(1998)によれば、ドイツ語では動詞の直前の位置が焦点となる。

参考文献

- 荻野綱男・塩田雄大 1994 「朝日新聞データベースを利用した言語研究」『日本語学』13-5 : pp.28-39 .
- 久野暉 1978 『談話の文法』大修館書店 .
- 国立国語研究所 1964 『現代雑誌九十種の用語用字(3) 分析』(国立国語研究所報告25) 秀英出版 .
- 近藤泰弘 1991 「古典文法研究の立場から考えた<検索>と<テキスト>」『日本語学』10-11 : 104-114 .
- _____ 1993 「文法研究における大量言語データ - 副助詞研究を例にして - 」『武蔵野文学』40 : 13-16 .
- _____ 1997 「「の」「こと」による名詞節の性質 - 能格性の観点から - 」『国語学』190 : pp.1-11 .
- 佐伯哲夫 1960 「現代語における語順の傾向 - いわゆる補語の場合 - 」『言語生活』111 : pp.56-63 .
- 情報処理振興事業協会 1987 『計算機用日本語基本動詞辞書IPAL』情報処理振興事業協会 .
- 杉本 武 1992 「正規表現によるプレーン・テキストの検索」『日本語学』11-7 : pp.112-121 .

- 徳永健伸・田中穂積 1991 「結合価情報に基づく日本語語順の推定」『計量国語学』18- 2 : pp.53- 65 .
- 益岡隆志 1987 『命題の文法 - 日本語文法序説 - 』くろしお出版.
- 松下大三郎 1928 『改撰標準日本文法』中文館書院 . 復刊、(訂正再版)、勉誠社1978 .
- 矢田部修一 1996 「現代日本語における3 種類の主格助詞省略現象」『制約に基づく日本語の構造の研究(国際日本文科研究センター共同報告』国際日本文科研究センター所収:223- 239 .
- Chomsky, Noam 1981 *Lectures on Government and Bindings*. Foris.
- Hawkins, John A. 1994 *A Performance Theory of Order and Constituency (Cambridge studies in linguistics 73)* .Cambridge University Press.
- Jackendoff, Ray S.1972 *Semantic Interpretation in Generative Grammar* .MIT Press.
- Manfred, Krifka 1998 “ Scope Inversion under the Rise- Fall Contour in German, ” *Linguistic Inquiry* 29- 1 :75- 112 .
- Miyagawa, Shigeru 1989 *Structure and Case Marking in Japanese(Syntax and Semantics22)*. Academic Press.
- Rooth,Mats 1992 “ A theory of focus interpretation, ” *Natural Language Semantics*1 :75-116. Blackwell Publishers.
- Tsujimura, Natsuko 1996 *An Introduction to Japanese Linguistics*. Blackwell Publishers.
- Yatabe, Shuichi 1990 “ Quantifier Floating in Japanese and the - Hierarchy, ” *Papers from the 26th Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society* ,Vol.1:The Main Session,Chicago.CLS : 437-451.